

# 平成30年度第1回障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会議事録

平成30年7月30日（火）13:30～15:30  
十勝総合振興局4階C会議室

## 議事（1）情報提供

事務局より資料1～4に基づき説明

## 議事（2）障がい者が地域で暮らす上での課題の解決にむけて 相談先周知リーフレットの作成について

### 【地域づくり委員会で作成、配布したリーフレットについて】

- リーフレットを見て相談に来た事例が3件あったことは、作った側としては良かった。
- このリーフレットでは、視覚障がいの方へは不十分、情報として入ってこない。
- 病気、障がいの受容、認知がない人が「障がい福祉」と書いてあるものを手に取るだろうか。手に取れば、中身はとて面白いものだが。
- リーフレットは改善し配布を継続していく。

### 【障がい福祉に関する地域課題について】

- 帯広駅周辺のバスターミナルへの点字ブロックがわかりづらい。
- 盲導犬、補助犬への理解が不足している。飲食店等、民間企業も対応改善を。
- 障がい者用のトイレは確かに増えてきているが、重症心身障がい者で医療的ケアが必要な方は、おむつを換えるベッドが必要。あわせて介助者が入れる程のスペースがあるトイレというと、帯広市内だとイオンのみ、それが一番大きな課題という声が保護者から上がってきている。
- 駐車場で、車いす使用の場合、運転席ドアを全開にしないと乗り降りができないため、車いすスペースを確保しないとその場所に入りにくい。他県ではスーパーとか公共機関というものの優先駐車場に駐めてよい許可証、都道府県と市町村が発行している例もある。旭川のイオンは駐車許可証で優先スペース利用可。
- 十勝では、車でコンビニへ行き車いす使用を申し出ると、店員さんが商品を店外に持ってきてくれる。断られたことは今のところゼロです。ハードの部分も大事かもしれないけれど、田舎でしかできないようなソフトの部分というのは、もっと生かしていけるようなしなやかというものが大切と思う。
- 車いすでスーパーに行き、カゴの前で止まっていると誰かが取ってくれる。意外といい社会だなと、当事者になって思う。
- 十勝は広いし、移動、アクセスの問題がある。普段の生活ももちろんだが、特に、仕事をする、あるいは、働くことにつながっても移動手段がない。そういうことを考えていかななくてはならないと思う。

- 差別解消支援地域協議会に企業からも参加してもらい、サービス、啓発につながるような形での研修を行ってもらうことにつながればいいと思う。
- 障がい者の方々の組織でも、自分で移動もできる、ちょっとしたイベントにも参加できる方は元気。本当に大変な人は出てきてない人といつも思っていた。
- 病院内の医療相談につながる人の中に、障がいがあるのか、仕事が安定せず、生活苦で病院受診ができなくて症状が悪くなってから受診する人がいる。多重債務で、ご本人もなんだか仕事がうまくいかないと感じながらも、なかなか発達障がいというところまでにはつながらない。
- 社会的資源の乏しさゆえに、いわゆる昔で言う完全在宅の状態にある四肢麻痺の方がいる。夜間の支援体制が確保できない。お金の問題とか言うよりもマンパワーの問題で外出はできない。そこには定期的に、ほぼ毎晩誰かが行くようにして、インフォーマルでのサポートを受けているのが現状。
- 民生委員に期待されるいろいろな事例がある。引きこもりの子に民生委員としてどのような関わりをもっていくのかという話を小学校から求められたりとか、非常に幅広い。障がい、自閉症の子は、学校が終わった後に、最終的には地域ということになるので、どういうふうに援助するのかということが一番の問題。働ける子はいい。やはり地域に残る子を、誰に相談するんだというあたりは、地域、町内会で、地域の仲間を援助しあうべきだと思う。
- この間の民生委員会の中でも、障がい者の合理的配慮の資料が配られた。実際には個人で勉強するしかないが、地域の援助者として、そういうことも知ってもらうことは非常に大事だと思う。振興局から民生委員の中でそういうふうなことを取り扱ってもらえるような働きかけをしてもらうということは大事。障がいの問題からくる虐待のこともあるので、そういうつなぎをやってもらいたいと思う。
- この地域づくり委員会というのも、意外に周りには知られていないということをすごく感じている。今回の札幌での全道会議の中でも、地域づくり委員会の存在自体をどう知ってもらおうかという話が出ていた。事業予算がない中で、何ができるかということで、日高での地域づくり委員会の活動を新聞記事に載せてもらったことが紹介されていた。
- 重症心身障がい者で医療的ケアが必要な子のお母さんたちが、相談するところ、言うところがわからない、「うちの子は特殊だから」と。呼吸器付けて動き回る、とにかく装備品多い。お母さん1人で連れて行くのは大変だと思います。
- 誰に聞いていいかわからない、聞くところが一本化できていない、このことは誰に聞いて、別なことは誰に聞いて。当事者とかお母さんというのはいろんなところに聞き回らなければならない。このリーフレットの中身もそうで、相談者は、市町村の役場とか、福祉課とかに連絡した後については、聞かなきゃわからないということになってる。この人に聞けばすべてわかる、全部把握している、つなげる人が地域にいればいい。予算も出ないということだったんですけど、厚生労働省でモデルとか研究で予算出す事業を持ってきて、試験的に動かすことってできないのか。それでうまくつなげることができたり、流れができれば制度に盛り込む落とし込むような流れになればいいと思うんですけど。
- 国土交通省の予算で、毎年バリアフリー推進教室というのをやっている。パラスポーツについての予算で行う事業も行う。林野庁の事業で、「中山間地域における地域づくり」も活用。厚生労働省もいいが、他にもある。
- 今、地域にコーディネートできる人間がいなくていけないというのは、難病の方でも言われてまして、出れない方、重度の方が出るために活用できる社会資源は何かということ。そのあたりうまくつなげていく必要があるが、制度はあるけれど複雑すぎる、ハードルが高い。あるいは地域ではそのサービスが展開していないとかいろいろなことがあって、何をしたいという時に、そのための仕組みというの

が、4段5段6段というのが必要。その仕組みと一緒に考えていく人たちとかが必要なので、やはり、真ん中に立って動ける人がほしい。

- いろいろなお金を使ってという形で、どこかの団体と一緒にみたいな形でだともうちょっとハードルが低くなるかなと感じる。それぞれ関係する団体等の中にある何かの事業の中に、地域づくり委員会のことを知ってもらえる機会を設けつつ、あわせて地域課題的な部分、今出てたこともさらに盛り込めていけるようなというのも1つのやり方なのかなと。
- やはり当事者だと思う。当事者団体というか、本気で関わるのはやっぱり当事者しかいないと思うので。当事者とその身近な人たちが中心となってやる方向かなと。そういうところと地域づくり委員会が機会を持って、やるのが具体的になった時に、次の展開、予算取ったりとか。予算が取れなければ、権限があればやりやすいのかなとか。
- リーフレットを継続するため、検証をしていく。先ほどお話しにも出ていた、多重債務であるとか、医療費の相談など、そういう方たちは、周りの人が伝えないとそういう情報がわからない。今まで関わりがなかった人たちを、どうひろいあげていくというので、とりあえずの形としてこのリーフレットになったんですけど、本来の目的をより反映する形に次の機会にブラッシュアップしていきたい。
- 重度障がいの方が外に出れるという流れを作っていきたい。今まで出れなかった人たち、自力で動けない四肢麻痺とか、誰か手伝う人がいなければ出れない方。車いすやストレッチャーの乗れる車が自由に用意できない、好きなところ行けない、コンサート行けない。そういう方たちが出れるような、こうすればいいよという、何か敷居の低いところから、1つ1つ手をかけていくと徐々に広がっていくのかなと。それを検討していただきたい。
- 今上がったようなことを、調査みたいなこととかがってできるんでしょうか。当事者の声を具体的に聞かなければならない部分もあるでしょうし、それぞれ理由が違ったりするのかなと。それがいわゆる社会資源的なものか、マンパワーの問題で出れないのか。
- マンパワーは頼めば何とかなる。トイレは不安で不安でしょうがない。
- それがハードル。本当は出れるんだけどやり方を実は知らなくてとか、あとは気持ちの持っていきかたを含めて、洗い出しをやって初めてじゃあこうやってやっていけたらいいよと考えられる。それをやるのはやはり当事者団体の方とか、実際に困っている方、こうしたいという形で一緒やっていけたら進みそうな気がする。
- やるって決めて、目の前にある障害は、その時どうやってクリアするかと考えていかないと、最初にあれこれ考えて躊躇したら出れない。出るって決めたら、周りに知らしめて、「出るからどうにかして」とするしかない。気持ちですよ。
- 確かに。でも「出ちゃいけない」と思うんですけど、当事者は。迷惑かけるから。
- そう、それを「出ていいんだよ」と。出ていく人を増やして、その人を見てほしい。
- もっと当事者が出なければいけない。できないできない言い続ける。
- その当事者に、もっと自由に出かけていいんだよということを言いたい。
- 自分の子ども、今二十歳で、今だに多動で、店だとか行ったら急に走り回ったり、外に飛び出すということもある。ちっちゃい頃はそれがよりひどくて、実は一緒に出るのがすごく苦痛なことがあった。そういう親御さんはたくさんいるのかなと思う。駐車場の問題なんかでも出てたんですけど、子

もが多動の時なんか、実は、あのスペースを使いたい。基準のイメージが、そこは車いすの方とか、まあ妊婦さんくらいまで、それ以上は広がらない。元気のいいわがままなちっちゃい子が無駄に使うのはどうだというふうに思われるだろうと、なかなかそこは使えない。でも実際にスペースもないと、子どもがドアをガッと開けて隣にガンッとやって、お詫びをということがあった。そういう人たちのためにもというのがあれば、「暮らしやすさ」についてもっと広がりがあるのかなと思う。そういう意味で、いろんな障がいを持つ方たちで、「あればいい」というのがもっともっとあるのかなと思いますし、それを立場の違う人だとやっぱりわからない、聞いてみて、本当に今日にそうだったんだというのが非常にわかったんで、それを一般の人に広げていくというのは大事だなと思いました。アンケートみたいな形で拾い上げるという意味では、障がい福祉計画を策定する段階で、市町村によってはその辺までニーズ的なもの、もしかしたら拾っているのかもしれないですね。事務局の方で各市町村へ、どの辺までのニーズ調査をして福祉計画を立てているのかというのを事前に調べてもらってもいいのかなと感じました。